

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 所長

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 1 号について
平成 2 3 年度病害虫発生予報第 1 号を発表したので送付します。

平成 2 3 年度病害虫発生予報第 1 号
向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

| 作物名 | 病害虫名 | 発生量の 平年比 | 記載ページ |
|-----------------|--------------------|-------------|-------|
| 早期水稲 | 1 葉いもち | 並 | 2 |
| | 2 イネミズゾウムシ | やや少 | 2 |
| | 3 スクミリンゴガイ | やや多 | 2 |
| 冬春きゅうり (半促成) | 1 べと病 | やや少 | 2 |
| | 2 うどんこ病 | 並 | 2 |
| | 3 褐斑病 | やや少 | 2 |
| | 4 ミナミキイロアザミウマ | 並 | 3 |
| | 5 黄化えそ病 (MYSV) | | 3 |
| 冬春ピーマン | 1 うどんこ病 | やや多 | 3 |
| | 2 斑点病 | やや多 | 3 |
| | 3 アザミウマ類 | やや多 | 3 |
| 冬春トマト | 1 灰色かび病 | やや多 | 4 |
| | 2 葉かび病 | 並 | 4 |
| | 3 タバココナジラミ類 | 並 | 4 |
| | 4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) | | 5 |
| 野菜・工芸作物全般 | 1 アブラムシ類 | 多 | 5 |
| | 2 ハスモンヨトウ | 並 | 5 |
| カンキツ (露地栽培) | 1 そうか病 | 並 | 5 |
| | 2 かいよう病 | 並 | 5 |
| | 3 灰色かび病 | 5 | 5 |
| | 4 ミカンハダニ | やや多 | 5 |
| 果樹共通 | 1 カメムシ類 | | 6 |
| 茶 | 1 炭疽病 | やや少 | 6 |
| | 2 カンザワハダニ | やや多 | 6 |
| | 3 チャノコカクモンハマキ | 並 | 6 |
| | 4 チャハマキ | 並 | 7 |
| | 5 チャノホソガ | 並 | 7 |
| | 6 チャノミドリヒメヨコバイ | やや少 | 8 |
| | 7 チャノキイロアザミウマ | 並 | 8 |
| | 8 ツマゲロアオカスミカメ | やや少 | 8 |
| | 9 クワシロカイガラムシ | やや少 | 8 |

作物の生育状況 (4月中旬)

早期水稲は、移植後低温の影響により葉先の黄化・枯れが見られ、5日程度生育が遅れている。冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマトは収穫期、茶は開葉～摘採期、かんきつは新梢伸長期であった。

5月の気象予報

天気は平年に比べ晴れの日が多く、気温は平年並の確率40%、降水量は平年並または少ない確率ともに40%、日照時間は平年並または多い確率ともに40%と予想されている。
(1か月予報 鹿児島地方気象台 4月22日発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

(1) 天気は数日の周期で変わり、降水量は平年並の確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

(1) 補植用の取り置き苗は、葉いもちが発生しやすく伝染源になるので、補植が終わったら速やかに処分する。

(2) 曇雨天が続く場合はあらかじめ粒剤を施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに粉剤または液剤で防除する。

(3) 同一系統薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

2 イネミズソウムシ（やや少）

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の発生面積率16.7%（平年42.8%）は平年よりやや少、100株虫数1.7頭%（平年3.5頭）は平年並である。

[防除上の注意]

(1) 成虫が10株当たり5頭以上のほ場では、粒剤の水面施用を行う。水面施用に当たっては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整するとともに少なくとも4日間はかけ流しや落水はしない。

3 スクミリンゴガイ（やや多）

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の発生面積率55.6%（平年13.7%）は平年より多、 m^2 当たり貝数0.1頭（平年0.2頭）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

(1) 水田の入排水口には金網を張り、貝の侵入を防止する。

(2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施用を行う。

(3) 粒剤の水面施用に際しては、水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整するとともに少なくとも4日間（薬剤によっては7日間）はかけ流しや落水はしない。

冬春きゅうり（半促成）

1 べと病（やや少）

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の発生面積率60.0%（平年53.8%）は平年並、発病葉率0.8%（平年9.0%）は平年より少である。

[防除上の注意]

(1) ハウス内の換気を良くし、高温多湿にならないように注意する。

(2) 窒素切れや成り疲れによる草勢の衰えは、発生を助長するので適切な肥培管理に努める。

2 うどんこ病（並）

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の発生面積率40.0%（平年30.1%）は平年並、発病葉率0.4%（平年4.0%）は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

(1) 整枝・誘引・老化葉の摘葉等を行い、採光・通風を良くする。

(2) 耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 褐斑病（やや少）

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。

（平年値 発生面積率：33.7%、発病葉率：3.6%）

[防除上の注意]

- (1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は、発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるが、逆に少ない場合は草勢低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- (3) ベと病、うどんこ病の発生後には激発することがあるので、両病害の防除を徹底する。

4 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の巡回調査における発生面積率0.0% (平年10.0%) は平年並、1葉当たり虫数0.01頭 (平年0.2頭) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 促成栽培においては、すべてのほ場で発生を確認しており、また発生密度も高まっているため注意が必要である。
- (2) 本虫は薬剤抵抗性を獲得しやすいので、同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- (3) 収穫の終わった発生ハウスは、蒸し込み等により本虫を死滅させ、ハウス外への拡散防止や次期作の発生源を絶つよう努める。

5 黄化えそ病 (MYSV)

[防除上の注意]

- (1) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬され、発生後は急激に圃場内外に蔓延するおそれがあることから、今後嚴重な警戒が必要である。
- (2) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマが、圃場外に拡散しないように防除を徹底するとともに、圃場周辺の除草に努める。
- (3) 本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの西臼杵支庁・農林振興局 (農業改良普及センター) または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

冬春ピ・マン

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率60.0% (平年52.0%) は平年並、発病葉率12.3% (平年7.8%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥しすぎないように注意する。
- (2) 適切な肥培管理を行い、また、茎葉が過繁茂にならないよう整枝を行い、発病葉は除去する。
- (3) 収穫終了後は、ハウスを密封して病葉上の病原菌を高温で死滅させるか、病葉残渣を持ち出して処分し、次期作の伝染源を絶つ。

2 斑点病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率73.3% (平年31.4%) 、発病葉率5.9% (平年3.3%) はいずれも平年より多である。
- (2) 向こう1か月の天候は、平年より晴れの日が多く、降水量は平年並または少ない確率とともに40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- (2) 病原菌が植物体に侵入した後は防除効果が上がりにくいので、予防散布を行う。

3 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率53.4% (平年54.0%) 、10花当たり虫数2.6頭 (平年2.1頭) はいずれも平年並である。
- (2) ヒラズハナアザミウマの発生面積率53.4% (平年30.8%) はやや多、10花当たり

虫数34.6頭（ 平年5.4頭 ）は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 今作はヒラズハナアザミウマの発生が多い状況で推移しており、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。
- (2) ミナミキイロアザミウマは、10花当たりの寄生虫数が1頭から被害果が出始めるので、発見したら早めに防除する。
- (3) 今後、気温の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意する。
- (4) 卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2～3回の連続した防除を行う。
- (5) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- (6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (7) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、青色粘着トラップの設置により生息密度の低下を図る。

冬春トマト

1 灰色かび病 （やや多）

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の茎葉での発生面積率61.6%（ 平年47.8% ）は平年並、発病株率16.5%（ 平年6.7% ）は平年よりやや多である。
- (2) 果実調査による発生面積率38.5%（ 平年30.0% ）、発病株率1.3%（ 平年2.8% ）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病果・被害茎葉は、伝染源となるのでハウス外に持ち出し処分する。
- (3) 薬剤耐性菌が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

2 葉かび病 （並）

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率15.4%（ 平年31.5% ）は平年よりやや少、発病葉率6.2%（ 平年7.6% ）は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病初期の防除を徹底する。

3 タバココナジラミ類（タバココナジラミ バイオタイプQ） （並）

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率38.5%（ 平年22.9% ）、100葉当たり虫数2.7頭（ 平年3.5頭 ）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 気温の上昇に伴い増殖に好適な条件となるため、黄色粘着トラップ等を設置し、本虫の早期発見・早期防除に努め密度を抑制する。
- (2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- (3) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用を極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬や、コナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖型殺虫剤を防除体系に組み込む。
- (5) 栽培終了後は、蒸し込み等により本虫を死滅させ、ハウス外への拡散防止や次期の発生源を絶つよう努める。
- (6) ハウスの周辺雑草は休閑期のタバココナジラミ類の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場周辺に持ち出したトマト残渣及び野良

生えのトマト等には特に注意する。

4 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

[防除上の注意]

- (1) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

野菜・工芸作物全般

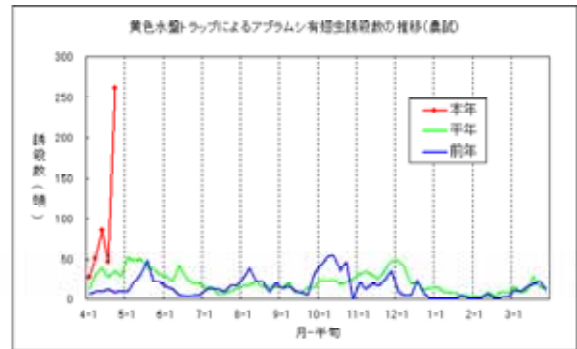
1 アブラムシ類 (多)

[予報の根拠]

- (1) 黄色水盤トラップによる有翅虫誘殺数 (佐土原)は、4月以降急激に増加している。(右図参照)

[防除上の注意]

- (1) ウイルス病を媒介するので 早期発見・防除に努める。



2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

- (1) フェロモントラップによる誘殺数 (佐土原)は、平年並である。

カンキツ(露地栽培)

1 そうか病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の越冬葉調査では、20ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)が確認されており平年並の発生である。
(平年値：発生面積率2.2%、発病葉率0.2%)

[防除上の注意]

- (1) 罹病した枝葉は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 今後の防除適期は、落弁期・幼果期である。

2 かいよう病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 2月中旬の越冬葉調査における発生面積率10.0%(平年20.6%)、発病葉率0.4%(平年2.6%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 罹病した枝葉は伝染源になるので、発見したら直ちに剪除する。
- (2) 今後の防除適期は、開花直前・落花後・梅雨期・秋芽生育期である。

3 灰色かび病

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は落弁期である。また、開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので特に注意が必要である。
- (2) 幼果表面に付着した発病花卉から幼果に伝染するので、枝をゆするなどしてできるだけ花卉の離脱を促す。

4 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率45.0%(平年30.7%)は平年より多、寄生葉率3.3%(平年7.2%)は平年よりやや少である。
- (2) 向こう1か月の天候は、平年より晴れの日が多く、降水量は平年並又は少ない確率ともに40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30% (1 葉当たり虫数 0.5 ~ 1 頭) を目安に防除を行う。

果樹共通

1 カメムシ類

[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、ウメやモモなどの結実中の果樹類では飛来に注意し、初期防除を徹底する。

茶

1 炭疽病 (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 4 月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値 発生面積率 : 23.3%、 m^2 当たり病葉数 : 1.0 葉)
- (2) 向こう1か月の天候は、平年より晴れの日が多く、降水量は平年並又は少ない確率ともに40%と予想されている。

2 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 4 月中旬の発生面積率69.3% (平年44.1%) は平年より多、寄生葉率8.6% (平年5.6%) は平年よりやや多である。
- (2) 向こう1か月の天候は、平年より晴れの日が多く、降水量は平年並又は少ない確率ともに40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をロ - テ - ションで使用する。
- (2) 合ピレ剤の使用は、リサ - ジェンスが発生しやすいので注意が必要である。

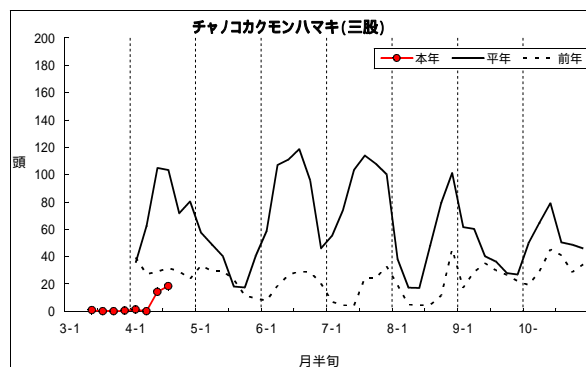
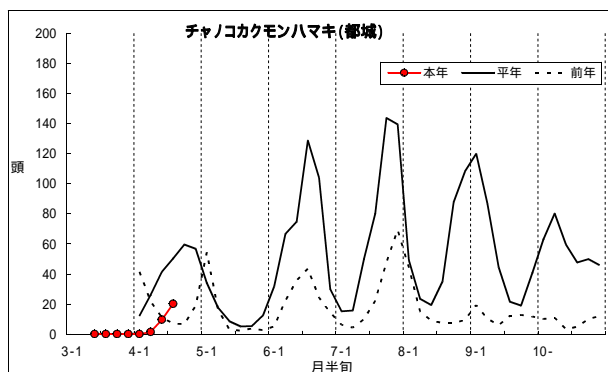
3 チャノコカクモンハマキ (並)

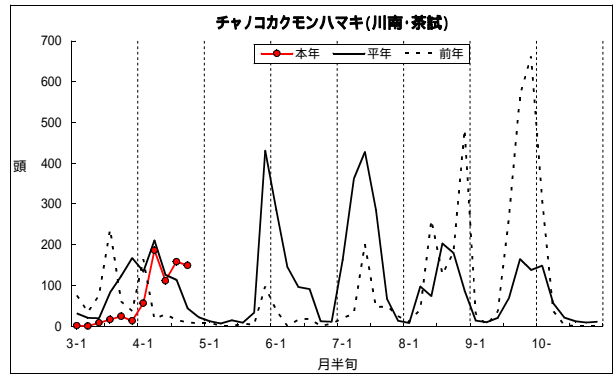
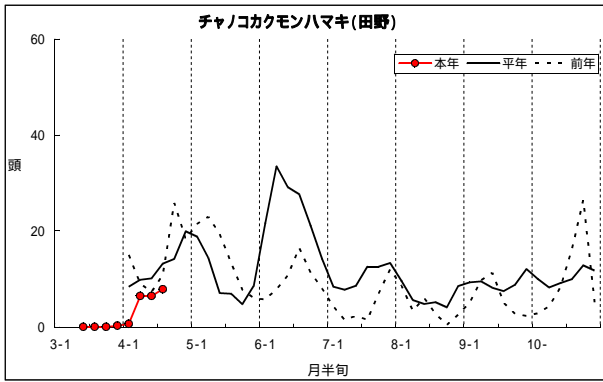
[予報の根拠]

- (1) 4 月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップによる誘殺状況では、平年並の発生である。
- (2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、第1世代に対しては越冬世代の発蛾最盛期の17日後、第2世代に対しては第1世代の発蛾最盛期の10日後である。





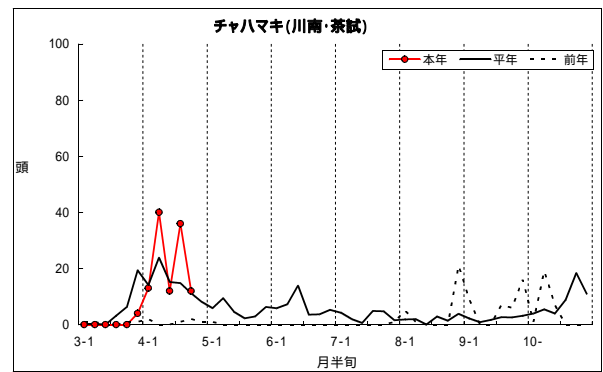
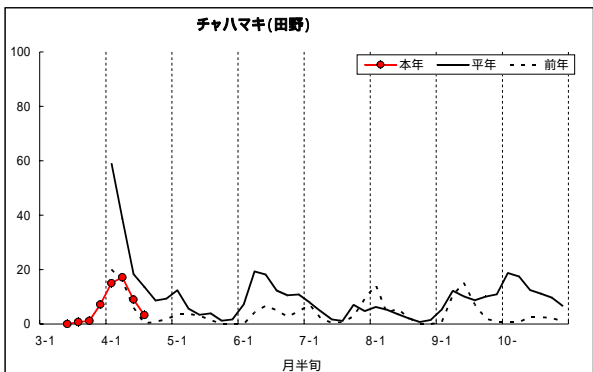
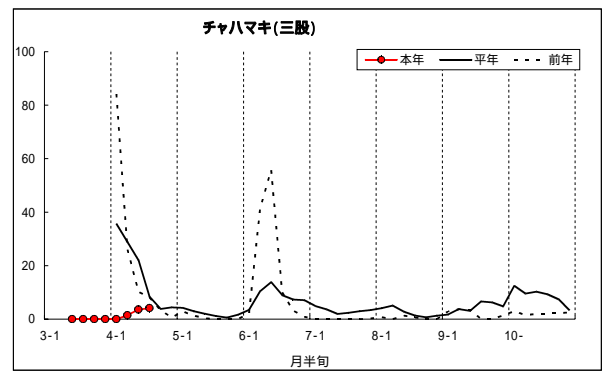
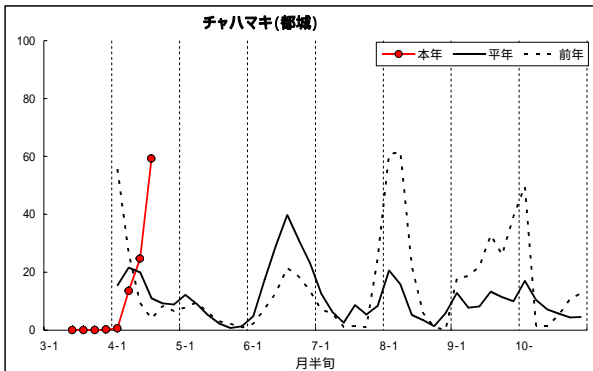
4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップによる誘殺状況では、発蛾最盛期は田野では4月第2半旬、他の3地区では4月中旬であったと考えられる。また、都城、川南(茶業支場)では誘殺数が多く、注意が必要である。



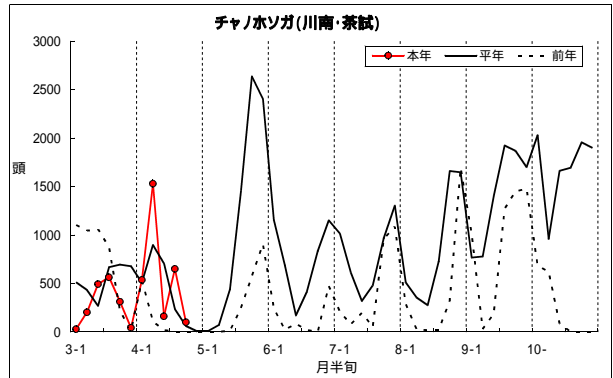
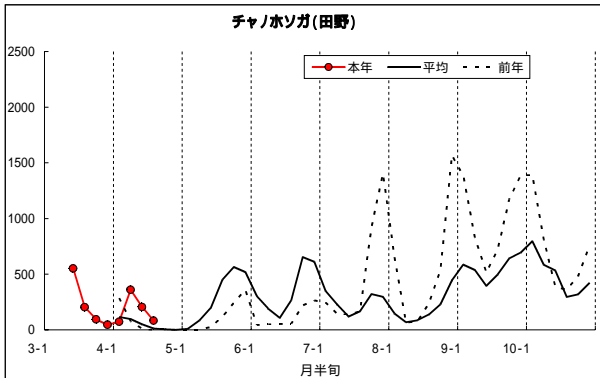
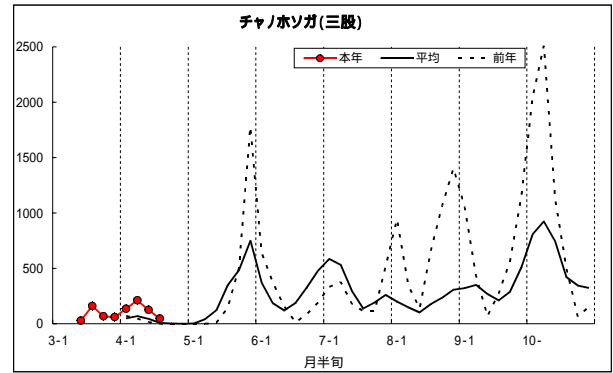
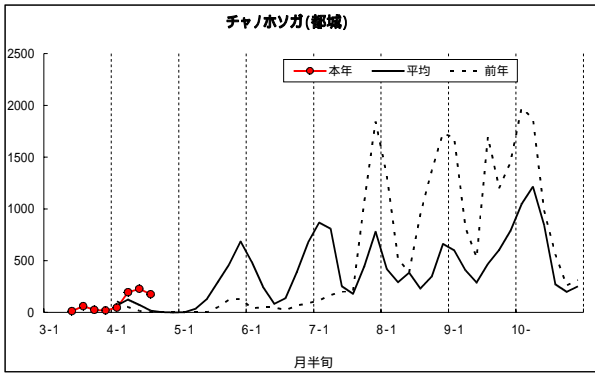
5 チャノホソガ (並)

[予報の根拠]

(1) 4月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップによる誘殺状況では、4月第2半旬が発蛾最盛期であったと考えられる。ほ場での発生状況を確認し、巻葉前に防除する。



6 チャノミドリヒメヨコバイ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬巡回調査では発生未確認である。
(平年値 発生面積率：5.9%、寄生葉率0.1頭)

[防除上の注意]

- (1) 例年二番茶期から発生が増えてくるので注意する。

7 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の払い落としによる発生面積率23.1% (平年34.5%)、払い落とし虫数1.5頭 (平年1.4頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 二番茶期に向けた防除対策に重点をおく。

8 ツマグロアオカスミカメ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬巡回調査では発生未確認である。
(平年値 発生面積率：18.5%、 m^2 当たり被害葉数：1.1葉)

[防除上の注意]

- (1) 茶以外の植物にも寄生するため、ほ場周りの除草を行う。

9 クワシロカイガラムシ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 4月中旬の発生面積率7.7% (平年34.3%)、寄生株率1.5% (平年13.4%) はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 第1世代幼虫の防除適期は、幼虫ふ化開始から2週間後または幼虫ふ化最盛期であるので、ふ化状況をよく観察し防除する。
(2) 薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧に行う。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

3 発生量(程度)の区分

| | | |
|-------|--------|---------------------------------------|
| 多い | (高い) | やや多いの外側10%の度数の入る幅 |
| やや多い | (やや高い) | 平年並の外側20%の度数の入る幅 |
| 平年並 | | 平年値を中心として40%の度数の入る幅 |
| やや少ない | (やや低い) | 平年並の外側20%の度数の入る幅 |
| 少ない | (低い) | やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均) |

4 予察情報の種類

病虫害防除・・・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

(1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。

(2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。

(3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。

(4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。

(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。

ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp